

# えひめの歴史文化モノ語り

## 県歴博収蔵資料から ⑬

船手具足は、海上での戦いを想定して、最小限の金具しか用いずに作られた鎧(よろい)で、胴が魚の鱗(うろこ)のようになっているのが特徴である。この鱗の部分は水中に入ると逆立ち、浮袋の役割をする。ことから、「水中鎧」ともいわれる。兜(かぶと)も含めて素材のすべてが革でできており、通常の鎧に比べ

るとかなり軽くなっている。本資料の兜の裏には「大洲藩加藤家に伝わった鎧

を調べてみると、大洲藩6代藩主加藤泰衡(やすみち)の八男で、下野国黒羽(くろばね)藩大関家の養子となつた大関増業(ますなり)が、隠居後に使用した号であることがわかった。また、大洲藩加藤家に伝わった鎧

を調べてみると、大洲藩6代藩主加藤泰衡(やすみち)の八男で、下野国黒羽(くろばね)藩大関家の養子となつた大関増業(ますなり)が、隠居後に使用した号であることがわかった。また、大洲藩加藤家に伝わった鎧

船手具足(上)と金唐革。県歴史文化博物館蔵。テーマ展「よろいかぶと」では、胴裏の金唐革のみを6月5日まで展示中

## 大洲藩伝来の船手具足

## 海上用 大名自作の珍品

関括囊斎(かつのうさい)甲冑(かっちゅう)一領(一領)は、「ウルミ塗御具足箱」の朱書がある。この括囊斎荷大関公作」とある。こ

藤家に贈ったものである。このことから、船手具足は増業が自作して生家の加藤政を再建するため、増業は

増業が自作して生家の加藤政を再建するため、増業は



とが判明した。

年で、隠退に追い込まれて

増業が11代藩主になった1811(文化8)年、黒囊(くろふくろ)とは、袋の口を括(くく)るように身を慎んでいた。行き詰まった藩財政を再建するため、増業は特産品の殖産政策や藩校の設置などの藩政改革に取り組みが、家臣からの反発も大きく、就任からわずか13

増業が号とした「括囊」とは、袋の口を括(くく)るように身を慎んでいた。行き詰まった藩財政を再建するため、増業は特産品の殖産政策や藩校の設置などの藩政改革に取り組みが、家臣からの反発も大きく、就任からわずか13

がえる。

隠居後の増業は兵学の研究に注力したほか、武器の中でも鎧に大きな関心を寄せ、練革(ねりかわ)を用いた鎧の製法として「練革私記」を著している。船手具足は、この本で記したことを増業自身が実際に試したものと見える。大名自らがハンドメイドした鎧など、類例を聞かない。胴の裏側に舶来の豪華な金唐革(きんからかわ)が貼られているのも珍しい。船手具足は、軽量の鎧を目指す合理的な精神やオランダ趣味など、まさに増業自身を体現した資料といえよう。

(学芸課長・井上淳)

△随時掲載します▽